優れた水環境を次の世代へ
名水百選の全国大会
名水サミット開催

安曇野わさび田湧水群・いこいの池（豊科南穂高・重柳）

全国水環境保全市町村連絡協議会全国大会（名水サミット）を開催

水環境を守る 名水の地の皆さんが安曇野へ

全国の「名水」が所在する市町村で構成する全国水環境保全市町村連絡協議会の第29回全国大会「名水サミット in 安曇野」が8月28日から2日間の日程で行われました。初日には豊科南穂高の安曇野スイス村サンモリッツで大会が行われ、水環境保全への取り組みについて国への要望書の提出が決議されました。

続いて行われた「名水シンポジウム」では、協議会加盟市町村の関係者や市民など約600人が参加し、水環境や水質の保全などについて発表や意見交換をしました。

また、2日には協議会員を対象に市内の名水をめぐるバスツアーが行われました。

「名水サミット」は、毎年、名水の地で開催され、現在市の地下水保全への取り組みや安曇野の地下水の魅力を訪れた全国の皆さんに発信しました。次回開催地は三重県志摩市です。

【名水百選】

昭和60年に環境庁（当時）が「名水百選」を選定しました。市内では合併以前の昭和60年に豊科と穂高地域をまたぐ一帯の湧水が「安曇野わさび田湧水群」として選定されました。平成20年度には北海道洞爺湖サミットに合わせ、「平成の名水百選」が新たに認定されました。全国水環境保全市町村連絡協議会は、「名水百選」の所在する市町村が連携し、水環境の保全の推進と水質保全意識の高揚を図ることを目的に設立され、平成27年度の協議会員数は184名水（175市町村）となっています。

また、平成8年には、国土庁（現在の国土交通省）が水資源を地域文化や産業、暮らしに生かしているかを評価した「水の郷」に豊科、明科、穂高をまたぐ一帯が認定されました。

全国の名水百選を紹介するパネル

あいさつをする阿部守一長野県知事（右上） 講演をする石原良純さん（中央上）
コーディネーターの橋本淳司さん（左上）
会場で配布された地下水を水源とする安曇野の水道水（中央下）
市内企業のミネラルウオーターの試飲コーナー（左下）

名水シンポジウム

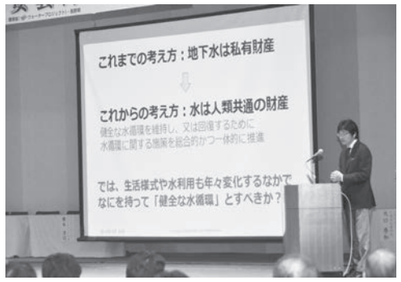
水の恵みや大切さを共に考える

名水シンポジウムでは「凛として、潤う。わたし時間。湧水で触れる北アルプスの恵み。」をテーマに講演やパネルディスカッションが行われました。

基調講演では、俳優で気象予報士の石原良純さんが「安曇野の水、日本の水 ―天気は水からできている―」と題して講演。雨などの気象現象について説明し「豊かな水の惑星・地球がもたらす、水のありがたさを感じることが必要」と話しました。

また、水ジャーナリストの橋本淳司さんは、地域の水を取り巻く環境の現状と課題について、国の水循環基本法と水循環基本計画について説明。橋本さんは「これからの考え方は『水は人類共通の財産』になった」とし、生活様式が変化する中、水の使用量も変わっていることから「『水があることが当たり前』から『水のありがたさ』を啓発して行くことが必要」と話しました。

名水シンポジウムの様子



水ジャーナリスト・橋本淳司さんによる説明

パネルディスカッションでは、「地方発！地域の水を守り・育み・活かす戦略」をテーマに、全国の名水が所在する市町村から大口秀和・三重県志摩市長、豊岡武士・静岡県三島市長、見形和久・栃木県塩谷町長と宮澤市長がパネラーとなり意見交換しました。

宮澤市長は、現在策定中の「市水環境基本計画」など、市の取り組みを紹介。地下水の保全や、水環境の保全に向け意識の高揚、健全な水循環を支える仕組みづくりについて提案しました。

コーディネーターを務めた橋本さんは「水環境の保全には『連携』が重要なキーワードになる。近隣の自治体、市民、企業と共に取り組むことが大切」とまとめました。

このほか、名水紹介として豊科郷土博物館館長の百瀬新治さんが安曇野の水について紹介し、豊科北中学校科学部の皆さんが市内の水質調査の結果を事例発表しました。

意見交換の様子